

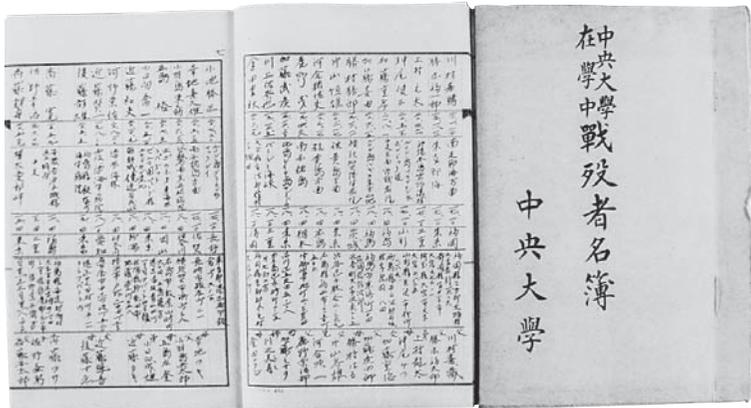
## 学徒出陣・戦没学徒

日中戦争が長期化し、太平洋戦争へと拡大していく中で、大学も総力戦体制に巻き込まれていく。

一九四一（昭和十六）年九月、政府は大学生の三ヵ月繰り上げ卒業を通過し、翌年三月卒業予定の学生を十二月に卒業させ、翌四二年度からはさらに六ヵ月繰り上げ卒業、前年九月に卒業式が実施されることになった。

本学では、四二年十二月の第一回繰り上げ卒業（第五七回卒業式）の際、学部・専門部合わせて三、二二一人の卒業生を送り出し、翌年の第二回では同じく三、三三三人、翌々年の第三回では四、一一二人の卒業生をそれぞれ送り出している。その多くは直ちに戦地へと向かった。

四三年六月の「学徒戦時動員体制確立要綱」は、国土防衛のために学業を休止して軍事訓練と勤労働員の徹底を決めた。十月には「在学徴集延期臨時特例」で学生・生徒の徴集延期が停止となり、また「教育二関スル戦時



「中央大学在学中戦没者名簿」

関係者からの届出による者もあったが、多くは三五年から四五年度の入学者のうち、学籍簿に兵役服務の届出のまま消息不明の者約一、八〇〇人につき入学当初の本籍地へ照会・調査し、判明したものである。「中央大学在学中戦没者名簿」にはその結果

非常措置方策」により理工系と教員養成学校学生のほかは徴集延期を停止、文科系大学の理科系への転換と年間三分の一の勤労働員などを実施することになった。

このような戦時体制強化の中で、文部省と学校報国団本部は、十月二十一日、神宮外苑競技場で徴集延期停止による学徒七万人の出陣学徒壮行会を開催した。十二月一日には、第一回学徒兵が入隊し、大量の学生を直ちに軍隊へ送り込むきっかけとなった。いわゆる「学徒出陣」である。

本学からも多くの学生が、繰り上げ卒業や学徒出陣により戦地へ送り出されていき、そのまま帰らぬ存在になった者も多かった。その中には『きけわだつみのこえ』に手記が掲載された上村元太や大塚晟夫、<sup>うえむら</sup>「第七八振武隊日誌」で知られる佐藤利男らもいた。

本学では、五五年の創立七十周年を機に、在学中に戦死した学生の調査を行った。戦没者については、遺族やとして、四〇一人の戦没年月日および場所・遺族氏名および続柄等が記載されている。七十周年記念式典で行われた慰霊祭の祭祀者一覧には、學員戦没者三八〇人ともこの四〇一人の名前が記された。

本学関係の戦没者はこれがすべてではなく、いまだ全貌は明らかになっていない。ただ、六五白門会の野瀬務が「出征学徒の戦中、終戦時の記録」を四八年法学部・経済学部卒業生を中心に調査したり、最近では、在学生がゼミナール活動の一環として多くの先輩や関係者たちに戦争体験を取材し、その結果を『戦争を生きた先輩たち』I、IIとして刊行するなど、当時の学生たちの姿がより明らかにされてきている。

ところで、戦後初めて学内で戦没者の慰霊祭が行われたのは、四八年十一月二十四日、大学祭当日のことであった。図書館地下に祭壇を設けて戦没学徒や教職員を慰霊することになり、加藤正治学長が祭文を読み、多くの教職員や学生・遺族が焼香を行ったが、実際の運営・進行は導師や僧侶の役をはじめ、すべて五葉会や仏教青年会などを中心とする学生の手によって行われた。占領下で当局に配慮しながらの実施であったという。